

冬鳥ウォッチ 2017/18 年冬の報告 — 17/18 冬のアトリは西日本に多かった？—

バードリサーチ 平野敏明

サクラの季節も終わり、今年も新緑の季節がやってきました。サンショウクイが、独特のリズムで上空を鳴きながら通過する姿も見かけます。待ちに待った夏鳥の季節の到来です。一方で、か細い声で鳴きながら通過するマヒワに一抹の寂しさを感じるのは私だけでしょうか。2017/18 年冬（以下、今冬）は、北海道や日本海側だけでなく九州地方等にも大雪が降り、全国的に寒さの厳しい冬でした。はたして、今冬の冬鳥たちの渡来状況は、どうだったのでしょうか。以下に4月10日までに届いた冬鳥ウォッチの結果から、今冬のアトリやマヒワなど冬鳥の記録状況を報告します。

調査状況

今冬は、27名の方によって北海道から九州までの71か所から、6種合計125件の情報が届きました。しかし、調査地数、情報件数、参加者数とすべてにおいて減少しました。都道府県別の調査地では、関東地方が最も多く34件、次いで中国・四国・九州地方（17件、ただし中国地方は0件）、中部地方（14件）でした（図1）。北海道が1件、東北地方と近畿地方からは情報が得られませんでした。今冬も、地域別では、調査地数および情報件数の合計とも、2008/09 冬以降の10年間で過去3番目に少なく、やや寂しい状況でした（図2）。

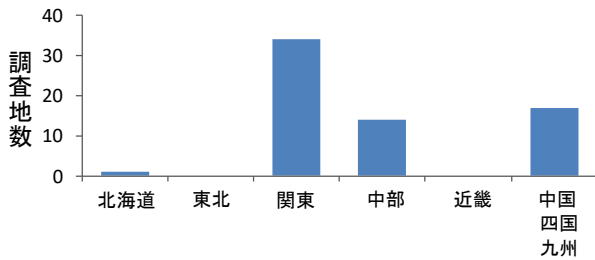


図1. 今冬の地域別調査地数。中部地方には、東海地方や甲信越地方を含む。

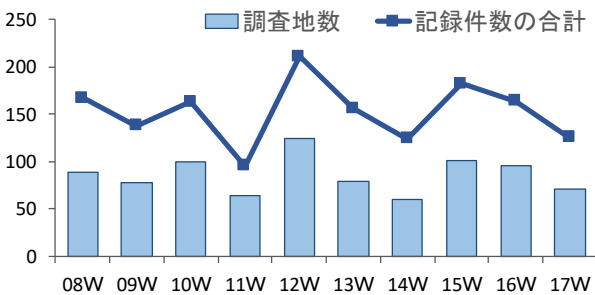


図2. 2008/08 冬以降の10年間の調査地数と各種の記録件数の合計の推移

各種の記録状況

今冬は、調査対象種の6種すべてが記録されました。しかし、例年通りイスカ、ハギマシコは著しく少なく、それぞれ2件と1件でした。アトリとカワラヒワは全体的に記録件数が多かった2016/17 年冬（以下、昨冬）に比べると、やや少ないものの今冬はそれぞれ36件と40件で、他の4種より多く記録されました。昨年、それまでより記録件数が著しく増えたカシラダカは、26件と再び減少しました。昨年増加したのは、2016年10月に国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで危急種に選定されたことで、観察者の興味を引いたためと考えられました。今冬はやや興味が薄れてしまったのかもしれませんが。マヒワ（19件）も少ないままでした。

各種の地域別の記録状況

アトリを個体数ランクでみてみると、36件のうち55.6%は50羽以下の小さな群れで、特に20羽以下が多くを占めました。一方で、201羽以上の大きなランクも30.6%と2番目に多く記録されました。16年冬は、201羽以上の大きな群れはわずかに2件でしたので、今冬は昨年に比べるとアトリはやや多かったと言えます。実際の個体数でも、最大6,000羽のほかに5,000羽や3,000羽の大きな群れが記録されました。地域別にみると、こうした大きな群れが記録されたのはその多くが四国や九州地方でした。関東地方や中部地方ではその

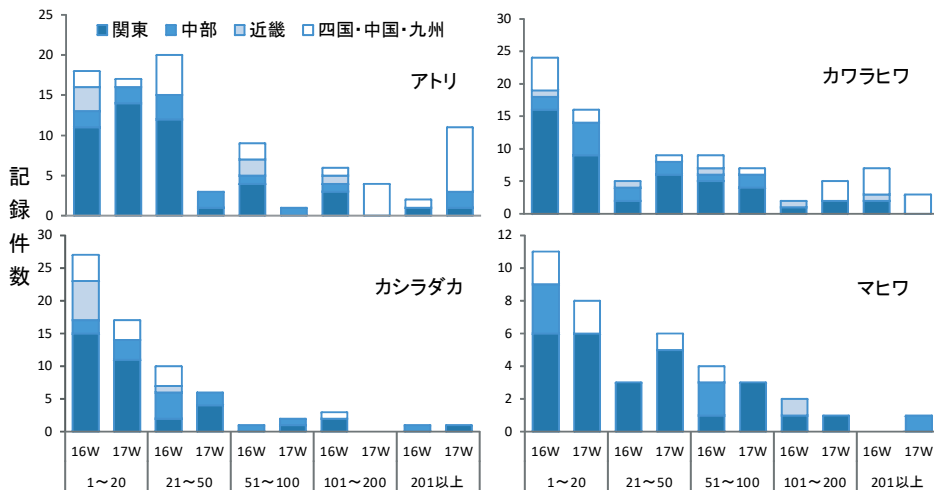


図3. 主要な4種の個体数ランク別の昨冬と今冬の記録件数の比較

ほとんどが1~20羽の小さな群れでした。したがって、今冬のアトリは四国や九州地方に多かったと言えそうです。なお、2015/16年冬に東北地方や関東地方で記録されたような数万から数10万羽のような巨大な群れは報告されませんでした。

カワラヒワは、昨冬と比べると1~20羽の小さな群れと201羽以上の大きな群れがやや減少しました。昨冬では大きな群れは関東などでも記録されましたが、今冬は四国・九州の3件だけでした。カワラヒワも今冬は、昨冬よりやや少なめだったと言えそうです。

カシラダカは、今冬も記録される群れの大きさは全体的に小さく、50羽以下の群れが88.5%を占めました。201羽以上の大きな群れは、1件のみで、101~200羽は0件でした。地域的には、関東や中部地方のほうが中国・四国・九州の西日本より記録件数が多い傾向がありました。とすると、カシラダカの主要な越冬地は、本州中部以北なのかもしれません。

マヒワは、50羽以下が最も多く73.7% (14件) で、51~100羽が3件、101以上の群れは合計2件だけでした。今冬は、関東地方が15件で全体の78.9%を占めました。このことから、今冬のマヒワは、関東では大きな群れこそ記録されなかったものの、やや小さな群れが各地に出現したようです。ただ、記録件数が少ないことから、2010/11年冬のように関東地方の広範囲に出現しなかったのかも

しれません。

栃木県でのアトリとマヒワの11年間の変動

アトリとマヒワは年によって記録状況が著しく変動することは、冬鳥ウォッチの過去の報告から明らかです。では、どの年が多く、どの年が少ないのでしょうか。これを知るには、毎年同じ調査地で同じ時期に調査をする必要があります。過去の記録を見返すと、栃木県の中央部から南部付近では11年間にわたって、7か所で継続的に調査されてきました。調査地数は少なく狭い範囲ですが、この結果をもとに、同じ地域での年による変動を比較してみました。調査地の環境は、都市公園や里山、牧草地などを含む里地、広大な草原です。図4は、個体数の概数を0~5の数字で表して年ごとにその合計をグラフにしたものです。どの調査地もまったく記録されなければ0、大きな群れが複数の調査地で記録されると個体数ランクの合計も大きくなります。

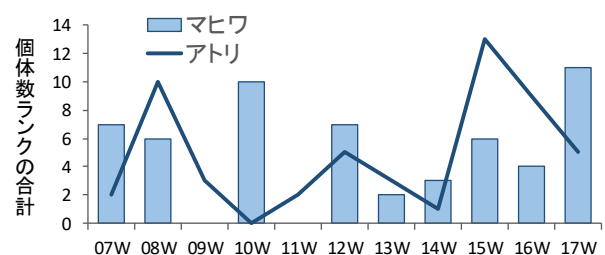


図4. 栃木県の調査地7か所における11年間のアトリとマヒワの個体数ランク



これによると、アトリは、2008/09年冬と2015/16年冬に著しく多く、2012/13年冬と2017/18年冬がやや多いことが分かりました。2008/09年冬は関東全域でアトリが多く、東京の公園などでも群れが記録されました。また、2015/16年冬は数えるのが不可能なほどの大群が東北地方から栃木県に飛来した年でした。一方、マヒワは、2010/11年冬と2017/18年冬に多く、2007/08年冬、2008/09年冬、2012/13年冬にやや多いことが分かりました。アトリは概ね3年ごとに、マヒワは2年あるいは3年ごとに変動を繰り返しているようにみえます。今回の結果は、栃木県の比較的狭い範囲の都市公園や里地・里山などの環境で、調査地数も少ない調査結果に基づいています。そのため、地域が変わればまた違った年変動をするのかもしれませんが。

終わりに

今冬の冬鳥ウォッチは、参加者が少なく、やや低調でした。今回、調査地が少なかったのは、本調査も今冬で12年目が経ち、調査自体に目新しさがないことで参加者の皆さんの興味が低下してしまったのかもしれませんが。あるいは、今冬は、前述のように一部の地域を除くとマヒワやアトリといった愛らしい美しい鳥たちが少なかったために、あまり観察者の目に留まらず、カワラヒワやカシラ

ダカの記録も報告されなかったのでしょうか。過去の調査でも、マヒワやアトリが都市近郊に多く出現する冬は、参加者数も急激に増加する傾向がありました。さらに、今冬は日本海側や北日本では大雪で、戸外に鳥を観察に出かける状態になかったのかもしれませんが。いずれにしろ、来年はもっとこの調査の面白さをアピールし、新たな角度から解析できればと考えています。

さて、今冬は調査対象種6種が記録されたものの、イスカとハギマシコは今年も極めて記録件数が少ないままでした。ただ、イスカは関東の山地や山沿いの林では群れが記録されているとの情報もあります。と、すると、身近な場所に降りてこなかったことも関係しているのかもしれませんが。同様に、ハギマシコの生息環境もカワラヒワなどとは違い、山地や海岸付近の岩場など荒地です。そのため、人目につきにくく、情報が得られにくいかもしれません。1960年代などにはイスカの大きな群れが、1970年代には100羽を超すハギマシコの群れが関東でも記録されています。これらの鳥たちは、単に人目につかないために記録が少ないのか、それとも繁殖地での環境が悪化して飛来数が少なくなったのか、大変気になります。生息状況をはっきりさせる上でも、今後、これらの鳥たちの情報も積極的に収集する必要があります。

また、本報告では、栃木県の調査地の結果を使って、11年間のアトリとマヒワの変動の様子を紹介しました。改めて、これらの鳥の飛来状況が年によって変動することが示されました。興味深いのは、同じアトリ科に分類される2種であってもその変動のパターンが異なることです。これは、2種の繁殖地の違いなのでしょう。それとも繁殖期の食物の違いによるのでしょうか。マヒワは1年を通して植物の種子やマツ類の種子が主食で、アトリは繁殖期にはガなどの幼虫を、冬は木の実を食べます。しかも、マヒワは食物資源の豊凶によって、繁殖地を年により大きく変えることが知られています。とすると、今回の年変動も繁殖地

や越冬地での餌資源の豊凶とも関係があるのかもしれない。今後、さらに日本の各地で毎年継続して同じ調査地で記録を執り、持ち寄って解析することで、地域的な違いなどさらに多くのことがわかると思われ。ぜひ、今冬、調査にご参加いただきました皆さんには引き続きご協力いただければ幸いです。最後に、2017/18年冬の冬鳥ウォッチにご協力いただきました皆さんのご芳名を以下に記してお礼にかえさせていただきます。

五十嵐勉，石塚文信，井上賢三郎，井上幹男，うえはら，大井智弘，大塚啓子，籠島恵介，加藤美奈子，木村有紀，小林俊子，小松周一，柴田絵里，白石ひとみ，須田由美，武居佳子，出口翔大，長嶋宏之，萩原勝雄，濱 伸二郎，伴 孝夫，藤波不二雄，古川紀美子，本田孝明，三上かつら，渡部 通の各氏。